

# 「つなひろ」を使った地域のオンライン日本語教室 立ち上げ支援

ーはじめて日本語を学ぶ生活者にオンラインで実施するための工夫ー

黒田亮子・笠井陽介・國頭あさひ・熊野七絵

## 1. はじめに

国際交流基金関西国際センター（以下、KC）は、訪日日本語研修やeラーニング教材の開発、運用を行うとともに、近年、外国人材受入れ関連事業の一端も担っている<sup>(1)</sup>。2023年3月に開催したKC25周年記念シンポジウム<sup>(2)</sup>では「外国人材の受け入れ・共生のための日本語教育支援ー海外での支援から国内へー」と題して、国際交流基金の取り組みについて紹介したうえで、文化庁（現文部科学省、以下文科省）や国内の生活・就労分野の専門家とともに、リソースの相互活用や教師研修、海外と国内の日本語教育支援の連携の必要性について議論した。

上記のシンポジウムでは、文科省が、国内の日本語教育空白地域解消事業の一環として開発、運用してきた生活者向け日本語学習サイト「つながるひろがる にほんごでのくらし<sup>(3)</sup>」（以下、「つなひろ」）もリソースの一つとして取り上げた。文科省ではこのほかにも日本語教室の立ち上げに取り組む「地域日本語教育スタートアッププログラム」や「日本語教育の参照枠」に基づく対象分野別のモデル事業の開発や普及も進められている。一方、各地方公共団体においては、外国人材受入れ・共生に向けて「日本語教育の推進に関する法律」が成立したことを受け、新たな方針に対応する日本語教育支援の体制づくりや取り組みが進められている。

KCは従来、近隣の地方公共団体やボランティア団体との協力・交流、日本語ボランティア研修会等への出講を行ってきたが、コロナ禍や上記の動きを受け、オンラインの活用や日本語教室立ち上げに関する相談や出講依頼も増えてきている。

本稿では、KCが公益財団法人大阪国際交流センター<sup>(4)</sup>（以下、IH）からの相談を受け、協力して実施した「つなひろ」を主教材とした地域のオンライン日本語教室の立ち上げ支援の取り組みについて、実施の経緯、オンライン日本語教室の概要、学習の流れと補助教材、ボランティア支援などについて報告し、その成果について述べる。

## 2. 実施の経緯

実施の経緯は、IHから、2023年度にオンライン日本語教室を立ち上げるべく企画を立てているが、IHには日本語教育の専門家がいなかったため、専門的な立場から助言を得たいという相

談があったことに端を発する。IH は地方公共団体として大阪市内在勤等の外国人を対象とした各種日本語ボランティア教室を既に実施していたが、上記の新たな動きや方針を受け、オンラインを活用した日本語学習の初期支援や保障に舵を切り、そこから対話型のボランティア教室や社会への参加につなげるという方針で取り組みたいと考えていた。具体的には、文科省が推進する ICT および「つなひろ」を活用し、子育てや高齢など様々な理由で日本語を学ぶ機会を失い孤立する外国人住民が安心して日常生活や社会生活を送るために必要な日本語を学ぶ機会として、はじめて日本語を学ぶ人（以下、初学者）を対象としたオンラインによる日本語教室の開催を検討していた。そこで、先行してオンライン日本語教室を実施している複数の地方公共団体に、実施に関するアンケートや聞き取り<sup>(5)</sup>を行った上で、授業の前半は講師がクラスを進め、後半はボランティアと会話練習をするという学習方法や、クラスレベル、参加者数、参加費、実施回数、実施時期、学習時間、ボランティア研修などについて企画していた。なお、ボランティアは日本語教育の有資格者を募集することで、将来的にボランティアが講師を担えるようにという自走のための人材育成もねらいとしていた。

KC への主な相談は、「つなひろ」を用いて、①初学者を対象に、②オンラインで実施することについてだった。具体的には、「つなひろ」は全くの初学者にも使えるか、文字の学習はどうすればよいか、初学者対象であってもオンラインで講師の授業とボランティアとの会話練習という学習の進め方が可能か、などであった。また、学習者のレベルチェックはどう行えばよいかや、「つなひろ」のレベル2までを学習内容とすることで十分か、それを全40回で進めることはカリキュラムとして適当か、という相談もあった。そして、立ち上げにあたり、適切なカリキュラムを立て、オンライン授業をボランティアとともに行える講師、ボランティア研修会講師の紹介も依頼された。

「つなひろ」は、日本で暮らす外国人が経験する生活の場面に特化した、動画を中心とした自学教材であり、多言語及びローマ字対応のため、文字を習得していなくても、初学者でも抵抗なく学習を始めることができる<sup>(6)</sup>。「つなひろ」では、自分の理解できる言語を助けにしながら、「動画を視聴」し、「表現や言葉を学習」し、「サイトで学習したことを実際の生活で家族・隣人を相手に使ってみる」という学び方を推奨している。この「つなひろ」の特徴を生かし、学習者の理解できる言語による予習・復習を前提として、オンライン授業はボランティアとの会話練習を中心にするなど、学習の流れをシンプルにパターン化する工夫によって、①初学者を対象に、②オンラインで実施することが可能になると考えた。また、オンライン日本語教室を「つなひろ」での学習から実際の「生活」への橋渡しの場にできるのではと考え、KC が講師として IH のオンライン日本語教室の立ち上げを支援することとした。

### 3. 「オンライン日本語教室」の概要

本教室では、KC は講師としてカリキュラムの作成や授業の進行を担当し、IH は教室に関する広報、ボランティアや学習者の募集、関係者（講師・ボランティア・学習者）間の連絡および調整、オンライン授業の際の Zoom のホストなど、主催者として授業内外の実施・運営全般を担当した。「オンライン日本語教室」（以下、本教室）の概要は表 1 のとおりである。

表 1 本教室の概要

項目	概要
開講クラス	レベル 1 クラス：初学者を対象にしたクラス レベル 2 クラス：レベル 1 クラスから継続して勉強する人、 またはそれと同等レベルの人を対象にしたクラス
実施時期	第 1 クール 毎週火、木曜日 10時～11時半 レベル 1 クラス：2023年 5 月～7 月（20回） レベル 2 クラス：2023年 7 月～10 月（20回） 第 2 クール 毎週火、木曜日 19時～20時半 レベル 1 クラス：2023年10月～12 月（20回） レベル 2 クラス：2024年 1 月～3 月（20回）
学習時間	90分／回
実施形式	オンライン（Zoom を使用）で実施
参加者	学習者 10名／1 クール 講師 1 名／1 授業（2 名で活動）※2023年度は KC が担当 ボランティア 5 名／1 授業（10名で活動）
参加費	4,000円／1 クラス（20回）
学習内容	「つなひろ」を主教材とする レベル 1 クラス：「便利なフレーズ」「レベル 1」 レベル 2 クラス：「レベル 2」
学習目標	レベル 1 クラス：日常的に使われることの多い、短くて便利な日本語のフレーズや、よくある生活の場面で必要となる、日本語での日常的な表現や基本的な言い回しを使うことができる レベル 2 クラス：生活の中で知っておくとよい知識や制度、より便利に暮らすための日本語の表現や言い回しを学び、目的を達成することができる
評価	Can-do チェックシートによる自己評価

学習内容は「つなひろ」の「便利なフレーズ」、「レベル 1」、「レベル 2」までとし、「便利なフレーズ」と「レベル 1」を学ぶレベル 1 クラスを20回、「レベル 2」を学ぶレベル 2 クラスを20回の合計40回でカリキュラムを組んだ。受講前のレベルチェックには「つなひろ」の「自分に合ったレベルを探そう」のページを使用し、本教室の申し込み時に学習者に判定結果を申告するよう依頼した。判定結果が「便利なフレーズ」、または「レベル 1」の学習者はレベル 1 クラスからの参加、判定結果が「レベル 2」の学習者はレベル 1 クラス終了後に開講するレベル 2 クラスからの参加とした。

「つなひろ」は、「シーン」という学習項目ごとに別ページになっており、「便利なフレーズ」は 6、「レベル 1」は11、「レベル 2」は13のシーンがある。なお、「レベル 1」と「レベル 2」の各シーンは、3つの動画で構成されている。「つなひろ」のシーンは、「標準的なカリキュラム

案」<sup>(7)</sup>や ICT 調査研究<sup>(8)</sup>などをもとに、日本で暮らす外国人に必要なものが絞り込まれていることから、本教室では、そこからさらにシーンの取捨選択をすることはせず、「便利なフレーズ」「レベル1」「レベル2」の全てのシーンを扱うことで、表1で挙げた「学習目標」達成を目指した。なお、「便利なフレーズ」は、トピックが関連する「レベル1」のシーンと組み合わせて提示するようにした（表2）。

レベル1クラスの初回には対面の「ガイダンス」を設定し、学習者と講師、ボランティアとの顔合わせ、学習の流れの説明を行うとともに、オンラインでの学習経験の無い学習者に配慮し、Zoom ミーティングへの入室方法などを確認するようにした。また、レベル1クラス、レベル2クラスの最終回は「まとめ」として、生活の中で接する機会の多い場面をピックアップし、各授業回で練習してきた内容から広げて会話することに挑戦できるようにした。

表2 各クラスの学習内容

レベル1クラス			レベル2クラス		
回	場面	シーン	回	場面	シーン
1	自己紹介	ガイダンス、1-2 ※対面授業	1	挨拶	1-1、1-2、1-3
2	自己紹介	便利なフレーズ1、便利なフレーズ4、1-1、1-3	2	店のサービス	2-1、2-2、2-3
3	買い物	便利なフレーズ6、2-1、2-2	3	レストラン	3-1、3-2
4	買い物	2-1・2-2の復習、便利なフレーズ2、2-3	4	証明写真、クリーニング	3-3、4-1
5	買い物	3-1、3-2	5	美容院、電気屋	4-2、4-3
6	買い物	3-1・3-2の復習、3-3	6	スーパー	5-1、5-2
7	買い物	4-1、4-2	7	コンビニ、自治会	5-3、6-1
8	買い物	4-3、5-1	8	自治会	6-2、6-3
9	買い物	5-2、5-3	9	地域のイベント	7-1、7-2
10	レストラン	6-1、6-2	10	地域のイベント、病院	7-3、8-1
11	レストラン	6-1・6-2の復習、便利なフレーズ3、6-3	11	病院	8-2、8-3
12	宅配便	7-1、7-2、7-3	12	—	シーン1～8の復習
13	電車に乗る	8-1、8-2	13	助けを求める	9-1、9-2、9-3
14	電車に乗る	8-1・8-2の復習、8-3	14	役所	10-2、10-3
15	道を聞く	9-1、9-2	15	役所、図書館	10-1、11-1
16	道を聞く、銀行	9-3、10-1	16	図書館	11-2、11-3
17	銀行	10-2、10-3	17	年賀状	12-2、12-3
18	住民マナー	11-1、11-2	18	郵便局 インターネット	12-1、13-1
19	住民マナー	11-3、便利なフレーズ5	19	メール、電話	13-2、13-3
20	—	レベル1のまとめ	20	—	レベル2のまとめ

#### 4. 学習の流れと補助教材

2節で述べたように、「つなひろ」の特徴は、初学者も抵抗なく学べるよう多言語に対応していること、また、動画を中心に場面ごとにことばとフレーズが学習できることである。この

特徴を生かして、本教室の学習の流れをシンプルにパターン化して組み立てることで、ボランティアにとっても学習者にとっても負担が少なく継続して学びやすいように工夫した<sup>(9)</sup>。また、オンラインでの授業をより効果的に進めるために、いくつかの補助教材を準備した。

#### 4.1 学習の流れ

まず、学習者は授業の前に「つなひろ」で自習し、授業の後に文法解説の動画を視聴することとした。そして、授業ではボランティアとの会話練習を中心に、学んだことを使ってみる活動を行うこととした。授業における活動形態は、Zoomのメインルームでの全体活動とブレイクアウトルームでのグループ活動に分けられる。表3は、学習の流れと授業内で用いた補助教材を示したものである。

表3 学習の流れと補助教材

	活動形態	内容	補助教材	時間
予習	自習	・テーマと Can-do の確認 ・動画の内容理解 ・ことばとフレーズの確認		
授業	全体	あいさつ		3分
	全体	【動画1】 ・テーマと Can-do の確認 ・動画の視聴 ・ことばの練習 ・フレーズの練習 ・モデル会話の提示	ことばの印刷物 会話練習シート	15分
	グループ	・ボランティアと会話練習	会話練習シート	20分
	全体	・ふりかえり	Can-do チェックシート	5分
		休憩		5分
	全体／グループ	【動画2】 動画1と同様		40分
	全体	まとめ		2分
復習	自習	・自己評価とコメントの記入 ・文型説明の動画視聴 ・Padlet に投稿	Can-do チェックシート	

学習者は授業に参加する前に、授業で練習するシーンのテーマやキーワード、Can-do を自分の理解できる言語で確認し、動画を視聴する。動画の場面と内容を理解して、ことばとフレーズの意味も確認する。

授業では、まず予習の内容を思い出す作業として、メインルームで英語ページを一緒に見ながらテーマや Can-do を確認し、1つ目の動画を視聴する。動画によっては、内容理解のための補足や問いかけをすることもある。次に、講師の発音を聞いて、ことばを言う練習をする。続けて、フレーズの短い動画を使って、リピート練習やアテレコによる口慣らしをして会話練習の準備を行う。ブレイクアウトルームの前には、講師とボランティアにより提示されるモデル



会話を聞いて、どのように練習するのかをイメージして会話練習に臨む。

本教室の中心である会話練習は、学習者が動画と同じ場面に遭遇したときに日本語のことばやフレーズを使ってコミュニケーションできるようになることを目指している。ここで学習者は、自分に必要なフレーズをボランティアやクラスメイトに対して使ってみる練習をする。ブレイクアウトルームは、基本的に学習者2名とボランティア1名で、毎回できるだけ組み合わせが変わるようにランダムで割り当てられる。メインルームに戻ってからは、練習した内容を少し発表したりしたあと、Can-do が達成できたかどうかを振り返り、短い休憩を挟んで2つ目の動画に進む。

授業の後、学習者は「Can-do チェックシート」に学習の記録としてコメントを記入し、テーマごとの文型説明動画を視聴して復習する。初年度は Padlet を使ったコミュニティを開設し、「おすすめのランチは何ですか。」など、授業で学習したテーマに関連する質問に日本語で答えたり、写真や情報を投稿したりすることも復習のひとつとした。

#### 4.2 補助教材について

授業で使用する補助教材「ことばの印刷物」「会話練習シート」「Can-do チェックシート」には、それぞれ以下のような特徴とねらいがある。

##### a. ことばの印刷物

ことばの印刷物は、「つなひろ」の各動画にある「このことばを覚えよう」のことばと翻訳の一覧を印刷したものである。メインルームでことばを練習する際に、学習者は必要に応じて手元の印刷物を参照することができる。

##### b. 会話練習シート

会話練習シートは、ブレイクアウトルームでの会話練習の際、学習者とボランティアができるだけお互いの顔を見ながら話せるよう、動画スクリプトを元に作成した補助教材である(図1)。

6-1 なんめいさまですか。 *Nan-meesama desu ka.*

A	B★
<p>いらっしゃいませ。 <i>Irasshaimase.</i> きやくさま なんめいさまですか。 お客様は何名様ですか。 <i>Okyakusama wa nan-meesama desu ka.</i></p> <p>す おタバコは吸われますか。 <i>Otabako wa suwaremasu ka.</i></p> <p>それでは、こちらへどうぞ。 <i>Sore dewa, kochira e doozo.</i></p>	<p>ふたり 2人です。 <i>Futari desu.</i></p> <p>す いいえ、吸いません。 <i>Iie, suimasen.</i></p> <p>す はい、吸います。 <i>Hai, suimasu.</i></p>

■ことば

ひと 1人	ひとり <i>hitori</i>	One person
ふたり 2人	ふたり <i>futari</i>	Two people
さんにん 3人	さん-にん <i>san-nin</i>	Three people
よにん 4人	よ-にん <i>yo-nin</i>	Four people
ごにん 5人	ご-にん <i>go-nin</i>	Five people

A	B★
<p>いらっしゃいませ。 <i>Irasshaimase.</i> きやくさま なんめいさまですか。 お客様は何名様ですか。 <i>Okyakusama wa nan-meesama desu ka.</i></p> <p>す おタバコは吸われますか。 <i>Otabako wa suwaremasu ka.</i></p> <p>それでは、こちらへどうぞ。 <i>Sore dewa, kochira e doozo.</i></p>	<p>_____。</p> <p>いいえ、_____。 <i>Iie, _____。</i></p> <p>はい、_____。 <i>Hai, _____。</i></p>

1

2

ウェブサイト「つなひろ」にほんごでくらし (文化庁国際課) をもとに作成

図1 会話練習シートの例（表面と裏面）

「つなひろ」の動画は基本的には全て外国人と日本人のやりとりになっているため、スクリプトはA役とB役に分けて外国人役の発話のほうに「★」マークを付け、動画の外国人役の表現を中心に練習できるようにした。また、「つなひろ」サイト同様に、本シートもローマ字を併記した。

図1 左側が会話練習シートの表面であり、学習者が自分のことについて話すための工夫として、ことばの入れ替えができる部分に網掛けを施し、必要に応じてことばのリストを載せた。その際は、大阪在住の学習者が実際のやりとりに近い練習ができるよう、身近な場所の名前などを掲載するようにした。また、動画と同じ応答だけでなく別のバリエーションも練習できるよう、「はい」「いいえ」などの分岐を作って選択できるようにした。動画によっては値札や地図などを読む活動が含まれているものもあるため、読む素材などを会話練習シートの下部に加えて、そのシーンのCan-doを達成する練習ができるよう工夫した。会話練習シート裏面はスクリプトに頼らずに自由な返答ができるよう、外国人役の発話部分を空欄にした。

なお、本シートはボランティアと学習者のコメントを反映させて修正やバージョンアップを随時行っている。

## c. Can-do チェックシート

Can-do チェックシートは、この教室の自己評価の道具として学習者が自身の学習を管理するために作成したものである。資料には、授業の日程と動画の内容とともに、「つなひろ」から引用した Can-do の文言を各国語で記載した。IH が実施している他の日本語教室では試験による評価を行っていないことを踏まえて、本教室の評価方法は Can-do チェックシートを使った自己評価とした。

自己評価の尺度は3段階で、下から「1：少しできた」「2：だいたいできた」「3：よくできた」とした。学習者は目標とする Can-do 文言を見ながら達成度に応じて自己評価し、コメント欄に学習内容のメモや感想、今後の目標などを自由に記入できるようにした。手書きではなくタイピングでコメントを入力したい学習者のためにエクセルデータも共有し、コース終了時に任意で提出を求めた。

	シーン	Level 1	Can-do		コメント
4/18 (木)	1-2	Hello, my name is XX.	Greeting someone you are meeting for the first time	☆☆☆	
4/23 (火)	1-1	Good morning.	Choosing an appropriate type of greeting and knowing in which situations you should be the first one to offer a greeting	☆☆☆	
	1-3	It's a pleasure to meet you.	Choosing a phrase that suits the situation and giving a proper self-introduction	☆☆☆	
4/25 (木)	2-1	Where is XX?	Asking where in the store you can find the product you want Understanding location information	☆☆☆	
	2-2	Does this contain any alcohol?	Asking about product ingredients at a store	☆☆☆	

図2 Can-do チェックシートの一部

これら a、b、c の資料に加え、「つなひろ」を使ったオンライン教室に参加するにあたり学習者が学習の流れや自習のしかたについて一目でわかるように示した「コース受講の手引き」、初めてオンラインで学習する参加者を想定した「Zoom の使い方ガイド」や「クラスで使うことば」を、それぞれ参加者が理解できる言語に翻訳して配布した。

## 5. ボランティア支援

本教室はブレイクアウトルームでの会話練習が中心であり、ボランティアの役割が重要な位置づけとなっている。本節では、ボランティアのスムーズな活動をサポートするために行った取り組みについて述べる。

## 5.1 事前ボランティア研修会

IH は本教室のボランティア参加の条件を日本語教育有資格者としたが、応募者の中には教授経験がない人やオンライン形式で教えたことがない人も少なくなかった。本教室の特徴や目



的を理解したうえで、ボランティアが担当する会話練習の方法や役割、オンラインでの活動のし方に慣れてから参加できるよう、IH の提案で開講前に 1 回90分間の事前研修を計 4 回実施し、その研修に参加できることを応募条件とした。研修の 1 回目は IH が担当し、2 回目から 4 回目を KC が担当した（表 4）。

表 4 ボランティア研修会

	内容	形態
1 回目	IH 事業概要、Zoom の使い方、ボランティア登録など	対面
2 回目	「つなひろ」の概要と使い方、学習者体験など	Zoom
3 回目	オンライン教室の概要、会話練習の方法と模擬練習など	対面
4 回目	Zoom を使った会話練習など	Zoom

1 回目は IH より事業説明や地域の外国人生活者に関する情報が共有された。2 回目は、主教材である「つなひろ」の特徴を理解することを目標とし、学習者になったつもりでサイトを使ってみる体験などを行った。3 回目は講師とボランティアが対面で活動することができるため、チームワーク構築のために最も重要な回として位置づけた。まず、講師から補助教材や会話練習のポイントなどについて確認したあと、ボランティアはグループに分かれて交代で学習者役とボランティア役になって会話練習を行い、ボランティアとしての役割を互いに確認した。同様の模擬練習を 4 回目ではオンライン形式で行い、実際の教室での活動に備えた。

参加したボランティアからは、「対面とオンラインでの両方の研修があったのがよかった」という意見が多かった。2～4 回目の全ての回でグループワークを行うことにより、「ブレイクアウトルームでの最終到達目標が具体的に理解できた」「ボランティアの役割がよくわかった」などの感想につながったと考えられる。また、「他の方のよい点も学べ、工夫の仕方を取り入れたり、準備もしたいと思えた」などの教室に向けての前向きな声も寄せられた。

このような研修を事前に実施することによって、教授経験やオンライン指導の経験がないボランティアもある程度不安を解消してから教室に参加することができたと思われる。

## 5.2 授業におけるボランティアへのサポート

毎回の授業の前後には、10分程度講師とボランティアによる打ち合わせを行った。授業の前は、講師から会話練習のポイントを伝え、ボランティア同士でアイデアや準備したレアリアなどを共有する時間とした。授業後は、ボランティアが自身の会話練習を振り返りながら担当した学習者の様子や練習の手応えなどを共有したりした。

授業中の会話練習では、講師はカメラオフでブレイクアウトルームを巡回し、練習の状況や学習者の様子を観察した。ルーム内ではボランティアは学習者が言いたい表現を練習できるよ

う、様々な工夫をしながら支援を行っている様子が見られた。例えば、手元の絵カードを使って会話のバリエーションを増やしたり、小型のホワイトボードに大きく文字を書いて学習者の理解を助けたり、カメラ目線でわかりやすいジェスチャーをしたりと、オンラインならではの工夫があった。Zoomのブレイクアウトルームでは、ボランティアは他のグループの活動が見えないため、講師が気づいたことやよい練習方法などは、授業後の打ち合わせで紹介して全員で共有した。

ボランティアからは、この事前事後の打ち合わせが特に役に立ったという意見が多数あった。「他の方々の話を聞けて独りよがりにならずよかった」など、授業アイデアの共有についてだけでなく、「他の方の顔を見て話す機会があったのもよかった」「事前事後の相談が楽しかった」など、ボランティア同士の横のつながりの構築に役立ったと思われる。

## 6. 本教室の成果

本節では学習者を対象に実施したアンケートのコメント等から見える本教室の成果について述べる<sup>(10)</sup>。

授業全体の満足度は高く、授業内容について「とても実用的」「大阪での生活に早く慣れることができる」「外国人として日本で暮らすことに自信を持つことができた」など、本教室の学習内容を生活に役立つものとして評価するコメントが見られた。ほとんどの学習者が予習をしてから授業に参加できたと答えており、また授業が難しいと答えた人は少なかったことから、学習者は自分の理解できる言語で予習をすることで無理なく授業に参加できていたと思われる。

ブレイクアウトルームでの練習については、「ブレイクアウトルームセッションがとても好き。わからないことを質問するのにとても役立った」「苦手な部分を集中して練習するのによかった」などのコメントが見られ、ブレイクアウトルームの時間が効果的に使われていた様子もうかがえた。教室開講初期のアンケートにも「話す練習の時間を増やしてほしい」という声があり、講師はブレイクアウトルームの練習時間をできるだけ長く取ることができるよう心掛けながら授業を実施した。毎回異なるボランティアと練習することについては、「ボランティアの先生たちはそれぞれスタイルが違うので様々な角度から学ぶのに役立った」というコメントからも、好意的に受け止められていたことがわかった。

「つなひろ」で学習した内容を実際の生活の中で使う機会があったかについては、全員がアッタと答えていた。どんな時使ったかについては、レストランや買い物、図書館や区役所でのやりとり、近所の人とのやりとりなど、様々な場面が挙げられていた。実際に図書館でのやりとりを扱ったシーンで学んだあとは、図書館にカードを作りに行ったことを報告してくれた学習者もいた。学習者は本教室での学びを通し、より自信を持って実生活でも日本語を使ってみることができたと思われる。

学習目標の達成については、各授業におけるブレイクアウトルーム内の会話練習においても、レベル1クラス、レベル2クラスの最後に設けたまとめ回の授業においても、学習者は「つなひろ」で学習した場面・Can-doを中心に、そこから広げたやりとりをしながら、生活場面で求められるコミュニケーションの会話を行っている様子が見られた。今後は、本教室で学んだことを第一歩として、学習者がそれぞれの地域の日本語教室で学び続ける中で、対話や社会参加のための日本語学習へつなげていくことが望まれる。

## 7. おわりに

本稿では、「つなひろ」を活用した初期日本語支援としてのオンライン教室の立ち上げとその実施について報告した。①初学者を対象に、②オンラインで実施するという課題に対して、「つなひろ」の特徴を生かしたシンプルにパターン化した学習の流れとし、またオンライン授業を効果的に進めるための補助教材の準備や、授業の中心に位置づけたブレイクアウトルームでの会話練習をスムーズに進めるためのボランティア支援を行うなどの工夫によって対応することで、学習者にとってもボランティアにとっても安心してオンラインで学べる教室づくりを実現できた。学習者は教室で学んだことを実生活で積極的に使用している様子もうかがえ、本教室が「つなひろ」での学習と実際の「生活」への橋渡しの場となり、学習者が実社会に踏み出す一歩を後押しする役割を果たすことができたと言えよう。

2023年度後半からは、本教室の立ち上げ以降の運営体制を見据え、ボランティアを対象にしたメイン講師養成の研修も開始し、2024年度からは研修を終えたボランティアが講師の立場で新たに教室運営に関わるなど、引継ぎが進んでいる。

本報告が、初学者を対象としたオンライン日本語教室立ち上げの取り組みの一例として、同様の支援に取り組む地域における参考となれば幸いである。

謝辞：公益財団法人大阪国際交流センターの皆様、本教室のボランティア、学習者の皆様に感謝いたします。

### 〔注〕

<sup>(1)</sup> 国際交流基金は2019年度より外国人材向け日本語教育支援に取り組んでおり、そのうちKCは「JFT-Basic」や「いろいろ日本語オンラインコース」の開発・運用の一端を担っている。事業に関する関連研究や資料は下記参照のこと。

<<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/ssw/>> (2024年8月19日)

<<https://www.jpf.go.jp/jft-basic/report/document.html>> (2024年8月19日)

<<https://www.jpf.go.jp/j/kansai/clip/irodori-online/>> (2024年8月19日)

<sup>(2)</sup> 国際交流基金関西国際センター25周年記念シンポジウム「外国人材の受け入れ・共生のための日本語教育支援－海外での支援から国内へ－」

<<https://www.jpff.go.jp/j/kansai/news/2023/03/post-23157.html>> (2024年 8 月19日)

- (3) 「生活者としての外国人」のための日本語学習サイト「つながるひろがる にほんごでの暮らし」  
<<https://tsunagarujp.mext.go.jp/>> (2024年 8 月19日)
- (4) 公益財団法人大阪国際交流センター<<https://www.ih-osaka.or.jp/>> (2024年 8 月19日)
- (5) 調査は開催頻度、学習時間、レベル、費用などについてであった。「つなひろ」を活用している横浜市の事例では、設定した5つのテーマに合ったシーンを「つなひろ」の3つのレベルからピックアップし、そのテーマについて会話をするという活動を行っていた。
- (6) なお、IH やボランティアには、ニーズによって学習者が個別に文字学習を進められるようなリソースも紹介した。
- (7) 「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について  
<[https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kyoiku/nihongo\\_curriculum/pdf/curriculum\\_ver09.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/nihongo_curriculum/pdf/curriculum_ver09.pdf)> (2024年 8 月19日)
- (8) ICT を活用した「生活者としての外国人」のための日本語学習コンテンツの開発・提供に関する調査研究  
<[https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kyoiku/ICT\\_kaihatsuteikyo/pdf/r1416366\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/ICT_kaihatsuteikyo/pdf/r1416366_01.pdf)> (2024年 8 月19日)
- (9) 「生活者としての外国人」のための日本語学習サイト つながるひろがる にほんごでの暮らし 使い方ガイドブック (第4版) P13「使い方」と P26-29「学び方」を参考にした。<[https://tsunagarujp.mext.go.jp/about-link#ABOUTLINK01\\_h3\\_04](https://tsunagarujp.mext.go.jp/about-link#ABOUTLINK01_h3_04)> (2024年 8 月19日)
- (10) アンケート項目は、授業の満足度や感想、授業の難しさや補助教材のわかりやすさ、予習・復習、講師の授業やボランティアとの会話練習についてなどで、学習者のわかる言語で提示、回答された。

■執筆者

黒 田 亮 子	国際交流基金関西国際センター日本語教育専門員
笠 井 陽 介	国際交流基金関西国際センター日本語教育専門員
國 頭 あさひ	国際交流基金メキシコ日本文化センター日本語専門家
熊 野 七 絵	国際交流基金関西国際センター日本語教育専門員